『週刊ポスト』2018.7.30(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第44回 「南沙織」という作品と酒井政利のアイドル戦略

昭和45年4月、大学入学以来、その後の5年間は私にとって、おそらく人生で最も多くの時間を大衆音楽鑑賞に割いていた時期でした。バッグの中には分厚い教科書とともに『月刊明星』の付録の歌本が入っていました。

本欄では前回まで、沖縄と縁の深い歌手や歌をとりあげてきましたが、沖縄が本土復帰前にデビューした歌手で最も成功した女性アイドルを忘れてはいけませんね。

昭和42年10月、名門日本コロムビアに在籍していたプロデューサー酒井政利は辞表を出して退職、翌年、新たに設立されたCBSソニーの制作部門の採用試験に応募して合格。レーベル第1号としてフォーリーブス『オリビアの調べ』をヒットさせ、「伝説のプロデューサー」としての活躍が始まるのですが、手垢のついていないアイドル候補を探していた酒井は、同46年2月、作曲家・筒美京平とともに、沖縄から母親に連れられて上京してきた16歳の少女と面会します。

少女は、当時、全米のみならず日本でもヒットしていたリン・アンダーソンの『ローズ・ガーデン』ならと、その場で筒美のピアノ伴奏で歌唱、バイリンガルの少女の歌を聴いた酒井はデビューを即決、『ローズ・ガーデン』に似た印象の曲を筒美に依頼します。

面接からデビューまでの期間が短く、芸名も決まっていなかったため社内募集したところ「南陽子」と内定。しかし、作詞担当の有馬三恵子が少女のイメージは「陽子」より「サオリ」と発言し、酒井が「沙織」の漢字をあて、南沙織が誕生します。同46年6月発売のデビュー曲『17才』から『グッバイガール』までのシングル盤28枚は、7年余にわたり私たちを楽しませてくれました。

この間、企画物を除いてほぼ3か月半から4か月ごとに彼女の等身大とも思わせるような魅力的なシングル盤が定期的に発売されましたが、私が最も愛した名作群は15枚目の『想い出通り』までになります。

それは冒頭に記した私的な大衆音楽鑑賞期間と重なっていて、ほとんど愛唱できるほど親しく聴いていたことも理由の一つであるし、デビュー以来シングル盤の詞と曲を担当していた有馬三恵子と筒美京平のコンビがここで解消されたことが大きく影響しています。

そこには酒井と筒美、そして名付け親の有馬三恵子が仕掛けた「南沙織」なる架空の少女を通しての成長物語が活写されていました。

思春期から大人へと歩み始めた同世代の少年たちが、自らとともに成長する「南沙織」を、スターとしてではなく普通の感性を持つ身近な女性として見つめられるよう、作品の中に「生活感のある言葉と背景」を描き込んでいたのです。『17才』に続くシングル盤の曲名を並べるだけで「南沙織」という物語ができあがります。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中